

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

e-mail: shaketsushin@nifty.com

東京都港区本町六丁目八の二コーポルビル904号 電話(03)53377-4649 FAX(03)5339-5894

振替 〇〇〇〇〇〇一九一五八四三二 現金 中央貯蓄本店 No.1154163

購読料 月額700円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

ジャーナリズムの原点

寺田 寅彦のジャーナリズム論

原 義弘……2

東京の教育

西村 昭……4

労働組合は必ず再生する

滝野 忠……5

労働運動の現局面と強化への課題

『共産党宣言』のグローバリズム

伊勢 太郎……8

現代資本主義の基礎(二)

人類救済の有効な哲学とは

六津 五郎……9

時代閉塞からの脱出口(二)

消えゆくドル

ザ・エコノミスト……11

この世界で最も重要な基軸通貨はいつまでその地位をたもてるか？

読者からのおたより……13 編集部だより……10

刊 旬 社 会 通 信

NO. 924

二〇〇五年二月一日号

二〇〇五年二月一日発行
(毎月一日・十一日・二十一日三百発行)

ジャーナリズムの原点

寺田 寅彦のジャーナリズム論

峻厳な批判的精神

『寺田寅彦随筆集』（全五巻、岩波文庫）を読んだ。この書が編まれたのは昭和二十一年十月一日。すでに半世紀も前になる。寺田寅彦の名は知っていた。しかし、日本物理学の先駆けといった程度で、何も知らないというのがふさわしい。

この書を古書店で購入したのは、目次をくつてのこと。第一巻「どんぐり」「科学者と芸術家」「物理学と感覚」「丸善と三越」、第二巻「蓄音機」「一つの思考実験」「電車の混雑について」「相対性原理側面観」、第三巻「読書の今昔」「映画の世界観」「夏目漱石先生の追憶」、第四巻「北氷洋の水の割れる音」「鎖骨」「神話と地球物理学」「化学と文学」「ジャーナリズム雑感」、第五巻「天災と国防」「俳句の型式と進化」「日本人の自然観」等わが戦線でいえば山川均の「鳥」（からす）、堺利彦の「火事と半鐘」を思い浮かべせる。寺田寅彦がいかに厳しい批判力、真の科学的精神をもち人間性豊かな人物であるかは一ひとつの文章に刻印される。

本書を編んだ小宮豊隆は寺田寅彦の書くものは、「いわば筋金の通った柔らかな手といった感じを持っているところから」、「峻厳な批判的精神が、科学的精神がとかく見落とされがちである」と、「寅彦の真骨頂はむしろその筋金にある」と論ずる。

「寅彦は科学も芸術とともに人生の記録であり予言であるところに、その本質を同じくすると言っている。自分で体験したことを整理して記録し、そこから出てくる理法を発見して将来に備えようとするのが、科学であり芸術であるとすれば、寅彦にとって、記録に値しないものは芸術ではないと同じく、何らかの点で予言の名に値しないものもまた芸術ではなかったはずである。逆に言えば、寅彦の書いたものは、寅彦が記録に値し予言を含むと信じていたからこそ、寅彦によって書かれたものは、何よりもまずそこから、何事かがまじめに学びとられ、まじめに反省され、まじめに先が考え続けられることを要請する。そういうことをしようとしなない読者は、寂しい寅彦をさらに寂しくする読者である」（第一巻、『後記』、三〇四頁）。

これなんぞ、かつての「論語読みの論語知らず」、今日では「マルクス読みのマルクス知らず」の運びとにそのまま当てはまりそうである。

寅彦の予見

「随想集」には二つのジャーナリズム論がのせられる。ともに第四巻に配され「ニュース映画と新聞記事」「ジャーナリズム雑感」と銘される。

前者ではニュース映画「映像」と「新聞」の「本質的な差別の目標」を分析する。寅彦は新聞は「きわめて紋切り形の抽象的な記載であって、読者の官能的印象的な連想を刺激するような実感的表象はほとんど絶無である」といい、映像は「零細些末な現象が意外にも重大な役目をつとめる」場合がある。新聞には「皆一定の公式があつて、簡単に無理やりその形ちにはめ込んで書いてしまう」のに、映像は「選択の自由があり従つて人為的な

公式定型の参加する余地はある。しかしレンズとフィルムは物質であってなんらの既成概念もなければ抽象能力もない。一見ばかり正直のようであって、しかも広大無辺の正確なる認識能力を所有している」と論じる。

このような認識・分析から寅彦は映像と新聞の課題と未来を予想する。映像は現象の記載ではなく、現象そのものである、と映像についてこう語る。

「写真は事象の全体を系統的に把握する能力をもっていない。それをするには撮影技師の分析的頭脳と、フィルムの断片を総合する編集者の総合的才能を必要とする」

これにたいし、新聞には「新聞記事というものは、読者たる人間の頭脳の活動を次第次第に萎縮させその官能の効果を麻痺させるといふ効能をもつ」「新聞の概念的社会記事から人間界自然界における新しき何物かを発見しうる見込みはほとんど皆無」と厳しい評価を下す。映像には時々「驚くような『発見』」があり、その発見に「真なるものの無限の宝庫」が隠れているからというのである、新聞についてはさらにきつい言葉が並ぶ。「新聞の社会記事というものは言わば宝の山の地図、しかも間違いだらけの粗末な地図以上の価値はない」と。

こうして映像に期待が表明される。それも無批判、先見性なしではない。条件が付けられる。人間の頭脳の啓発に多大な役目をつとめるものでなければならぬこと、そして映像と新聞の将来を予想する。

「広い意味でのニュース映画によって、人間は全く新しい認識の器官得たと言ってもはなはだしい過言ではない。そういう新しい人間としてわれわれはまだほんの孩児(がいに)のようなものである。したがって期待されるものはニュース映画の将来である。ニュース映画は日に日に新たに、永久に若き生命を保つであろうと思われる。そういう将来における新聞はもはや社会欄なるものの大部分を喪失しているか、さもなければほんとうの意味での『記事』となって、真に正確で啓発的な記事に変わってしまったであろう」

現代にあつてニュース映画は劇場だけに限られるのではなく、TV、インターネット画像として茶の間、個々人の部屋に飛び込んでくる。寅彦が生きた時代には想像もできなかった量、スピードをもつてである。

日々主義、その日主義

後者「ジャーナリズム雑感」ではジャーナリズムの限界と可能性にふれられる。まずジャーナリズムとは「日々主義、その日その日主義」と断ぜられ、ジャーナリズムの特異な相として「具体的事実の抽象一般化、個別的現象の類型化」|| 「その場限りのつじつま合わせを指摘する。この類型化」|| 「つじつま合わせ」|| 「特種(とくだね)合戦」にジャーナリズムの危険を鋭く述べる。少し長いがそのまま引用する。

「新聞はその記事の威力によって世界の現象自身を類型化すると同時に、その類型の現象を天下に撒(ま)き広げ、あたかも世界じゅうがその類型で満ち満ちているかのごとき錯覚を起こさせ、そうすることによって、さらにその類型の伝播をますます助長するのである。ジャーナリズムが恐るべき性能を充分に發揮するのはこの点であろうと思われる。

ジャーナリズムの指はミダスの指のように触れる限りのものを金に化すこともあり、反対に金もダイヤモンドもことごとく石塊とすることもある。キルケのごとくすべての人間

を動物に化することもあるが、また反対にとんでもない食わせものの与太者を大人物に変化させることもできるのは天下周知の事実であって事新しく述べ立てるまでもないことである。そうしてだれもそれを承知していないから知らず知らずこのジャーナリズムの魔術にかかってしまうのは実に恐るべきことといわなければならぬ」

「種取り（特種）競争」がさらにこれを助長する。資本主義と競争、ジャーナリズムの弱点克服はおもしろい。寅彦はかく断じる！

「こういういろいろの不思議な現象は、新聞社間の命がけの生存競争の結果として必然に生起するものであって、ジャーナリズムが営利機関の手にある間はどうにもいたし方のないことであろうと思われる。

ジャーナリズムのあらゆる長所と便益を保存してしかもその短所と弊害を除去する方法として考えられる一つの可能性は、少なくとも主要な新聞を私人経営になる営利団体の手から離して、国民全体を代表する公共機関の手に移すということである。それが急には実行できないとすれば、せめて、そういう理想に少しでも近づくようという希望だけでも多数の国民が根気よくもち続けるよりほかに道はないであろう。：それにしても毎日毎夕類型的な新聞記事ばかりを読み、不正確な報道ばかりに眼をさらしていたら、人類の頭脳は次第に変質退化して行くのではないかと気づかわれる」

TVと新聞

これら文章は昭和八年と九年に書かれている。メディアとして活字の新聞に映像のニュース映画が割り込んだ時である。この時代、ヨーロッパ・ドイツではヒトラーがラジオと映像を駆使し、ファシズム権力の座に登りつめた。

ニュース映画は今日、TVにとって代わられた。映像は「発見」と同時に、人の心を権力に引きつれる悪魔となり、それは新聞の比ではなくなった。

(T)

東京の教育

知人の作った替え歌ですが。東京の教育の現状をよくあらわしているので紹介します。元歌は知っている人はもう少ないと思いますが、戦時中結構はやった歌です。

「軍歌・勝利の日まで」・替え歌

1、卒業式で あの日の丸を／仰ぎ眺めて 君が代歌え／先ず教員が 起立で歌え／従わないと 免職にする／知事と二人で 力の限り／勝利の日まで 勝利の日まで

2、次は生徒だ 生徒の父母だ／立って仰いで 君が代歌え／しない学校 その校長と

／その担任は 嚴重処分だ／知事と二人で 力の限り／勝利の日まで 勝利の日まで

3、憲法違反 くだらぬ言うな／裁判所は たわごとねごと／靖国詣で イラクの派兵

／小泉総理 真似るのがよい／知事と二人で 力の限り／勝利の日まで 勝利の日まで

4、日の丸掲げて 君が代歌い／皇国日本 再建設だ／日の丸立てて 日軍進め／先ず北鮮に その次ぎ支那へ／知事と二人で 力の限り／勝利の日まで 勝利の日まで。

なお都教委は中高一貫の白鷗高校で例の「作る会」の教科書を使うことを決めました。全国で一％しか採用されていない代物です。

(三多摩労研センター代表 西村 昭)

労働組合は必ず再生する

—労働運動の現局面と強化への課題—

新自由主義とは「反革命」 労働組合、労働運動はいま存亡の危機にある。しかし、労働組合とその運動は、賃労働と資本の対立・抗争という資本主義の「構造」から自然発生的に生まれ、発展し、今日にいたった。現代世界は労働組合を必要としない「構造」に変化したのか。それは違う！ われわれの眼前にはマルクスやエンゲルスが『共産党宣言』、『イギリスにおける労働者階級の状態』で述べた諸現象が、そのままといって過言でない姿で立ち現れているのではないか。

支配階級にとって、行政改革、構造改革、規制緩和は資本の価値増殖を実現する「反革命」政策—二百年余の労働運動の成果の剥奪—として実行されている。中曽根第二臨調、国鉄分割民営化以降、「群て流れた」この二十年に、何が起きたのか。

第一。生産のたえまない変革、あらゆる社会状態のやむことのない動揺である。永遠の不安定と運動は、固定した、さびついたすべての関係を、それにとまらぬ古くてとうとい、いろいろの観念や意見とともにかき消した。

第二。それらがあらたに形作られても、それらはそれが自分的なものや常在的なものは、煙のように消え去った。

第三。こうして、今人びとは、自分をひややかな眼で見ることを強いられている。

第四。独占的大企業は自分の生産物の販路をつねにますます拡大しようという欲望に駆り立てられて、全地球を駆け回る。どんなところにも、彼らは巢を作り、どんな所をも開拓し、どんな所とも関係を結んでいる。

行政改革、構造改革、規制緩和とは、したがって、これまで労働組合をはじめとする社会運動、革命運動が資本の自由な支配の手を縛り、勝ち得た制度、慣行、権利、法制を根こそぎ奪い去る「反革命」なのであり、「新自由主義」の本質である。自由主義とグローバル化は資本を律する一法則だ。

国際自由労連ですら 国際自由労連ですら「現代世界は一九世紀に逆もどりした」と危機感を表明する。

「近年の新自由主義イデオロギーは、徹底的なグローバル市場の急成長というおどろくべき現実を生み出した。同様におどろくべきことは、国際社会がグローバル市場に最低限の社会的規制を加えるための真剣な努力を、まったくしなかつたことである。」

この結果、労働者が現在、直面している二一世紀のグローバル市場は一九世紀並か前民主主義的資本主義の制度的枠組みのもとで動いている、こうみえてくると、グローバル化がもたらしている社会的コストも、おどろくほどのことではない。何百万人という労働者が極度に不安定な労働を強いられており、家族の次の食事を稼ぐのがやっとという人々もいる。獲得した労働条件と権利、社会的保護は、業務移転の脅威のもとで揺さぶられている。見込みのある収益モデルの名のもとに、奴隷工場が復活している。(方針案、九頁)

「奴隷工場復活」とは刺激的な言葉である。同じことを『共産党宣言』はかく表現する。

「近代的工場は、家長長制的な親方の小さな仕事部屋を、工業資本家の大工場に変えた。工場の中につめこまれる労働者群は、兵隊と同じように組織される。かれらは下級の産業兵

として、下士官や士官の完全な階級組織のもとにおかれる。かれらはブルジョア階級、ブルジョア国家の奴隷であるばかりでなく、毎日毎時、機械によって、監督者によって、なかでも製造家たる個々のブルジョア自身によって奴隷化される。この専制は、営利が自分の最後の目的だとあからさまに公言するようになればなるほど、ますますけちな、ますます意地きたない、ますます腹立たしいものとなる」(岩波版、四九頁)

これが現実の世界、社会、そして資本主義である。労働組合はいまこそ再生させなければならぬ、そして再生する。くり返すが、労働組合は資本主義的生産様式に内在する矛盾にもとづくものであり、営利という非人間的目的が至上命令である社会では、けっして溶けてなくなるものではない。

「競争排除」が団結の基礎 労働組合の危機の原因はなにか。組織率・組合員数の減少だ。なぜ組織率・組合員が減りつづけるのか。産業構造、そして就業構造が大きく変わった。なぜ変わったのか。労働組合の合理化への全面協力である。合理化は資本の価値増殖を目的に実施される。人を減らし、回転率を速め、工場・事業体を二十四時間稼働させることで資本は吸血鬼のように活気づく。労働者減らしの合理化に協力したのでは、組織は増えるわけではない。

職場から駆逐された労働者はちやうど水が上から下に流れ下るように、労働条件は低くされ、労働組合への信頼を失ってゆく。「なんだ労働組合は労働者の権利拡大のための組織ではなかったのか。これでは保険にもならん。組合費はムダ」と。

ME・IT革命による生産様式の「大革命」、大企業間の競争は大企業の市場独占の揺らぎとともにさらに激烈になる。そして、ついに労働者同士が互いに「敵対者」であるかのようになり競争させられる。労働組合弱体化の根本は、労働組合が資本間の競争に巻き込まれるばかりか、資本と一体化して競争政策を押し進めた結果である。「競争の排除」こそ団結の礎なのだ。

資本の競争政策は民から官へと移っている。労働組合組織率は世界的な傾向で民が低く、官が高い。その官に規制緩和という名の民営化策であり、競争原理導入である。この傾向にただ黙ってながめていたのでは組合組織率は減り、労働組合の社会的影響力は小さくなるばかりである。

連合流「自己改革」 こうした危機意識がしだいに表明され始めたのが、連合第六回大会のことで、連合発足を歓迎した労働評論家、労働法学者すら①労組幹部・組合組織の官僚主義化が存在感、価値観を失わせた。現場主義にてっせよ。②「文書製造」を排し、組合員と未組織の決起を促せ。現場を歩き、実践を最大の武器とせよ。③非正規労働者を正面舞台に登場させよ。④参加でいいのか要求に力を注げとの注文が相次いだ。

連合第七回大会は「労働組合の自己改革・自己革新」を方針の柱とした。どんな組合運動が目ざされたのか。三つのことが示された。

第一。新しい時代を切り開くと①企業別組合の弱点克服、②あらゆるレベルでの参加追求、③政党との新しいあり方の方の強調である。その内容は①企業連に代わり産業別形成の促進、②「抗議」から「要求」へ、さらに「参加」へと政労資の合意形成、③民主党はたよりにならん自民党ともというもの。

第二。「労働を中心とする福祉社会」建設が目標と①雇用の創出・安定、②ワークシェアリ

ング、③新しいワークルールとの提起。

第三。組織拡大、非正規労働者の組織化で、予算の二四%（九億円）、人員の三〇%投入、産別組織にも予算の一〇%投入を呼びかけた。

連合の「自己改革」のなんたるかを実践で示してみせたのが二〇〇一年十月の日経連との「雇用に関する合意」だった。この合意は①雇用の維持・創出に関する社会合意の推進、②政府への要請と政労資による社会合意形成の推進の二項目からなる。ポイントは次の点にあった。

一、当面の施策として ①経営側は、雇用を維持・創出し、失業を抑制すること、②労働側は、生産性の向上やコスト削減など経営基盤の強化に協力するとともに、賃上げについては柔軟に対応する。

二、雇用の維持・創出を実現するため、日経連・連合は多様な働き方やワークシェアリングに向けた合意形成に取り組み、労使は雇用・賃金・労働時間の適切な配分に向けた取り組みをすすめる。

連合評価委「報告」は「評価」になるか なんのことはない。資本との一体化をさらに進めるとの労資協調推進宣言ではないか。こうしたあらたな参加体制である「労資政」協調を目的に労働関係者外に「連合の評価」を依託し発足したのが、「連合評価委員会」（二〇〇二年三月）だ。メンバーは七人でみんな労働運動の門外漢、自営業主に属し、大金持ちの人びとだ。最終報告は〇三年九月である。

この報告は評判をよんだ。連合労働運動の弱点をズバリ衝いてみせたからだ。連合傘下大企業労組幹部は苦虫をかみつぶし、大企業の横暴に苦吟する中小労組、連合路線に異議を唱える諸グループは「評価委報告は日本労働運動の未来をつくる素材」と高く評価する。しかし、よく考えてみなくても連合評価委員会「最終報告」の内容はこれまで、労働組合らしさをとりもどしたい、労働組合を再生させたいと日夜、労働に組合活動に、もっと広く社会運動に汗と時間と金を使い取り組んできた活動家組合員、自覚的労働者・市民の主張を荒く太い筆で書いてみせたにすぎない。その主張を要約してみれば――

- (1)労働組合・運動の原点の見直しと理念の再構築。
- (2)労働運動は量的危機とともに質的危機にさらされている。
- (3)働く者としての意識が希薄化し、働く者が働く者としての意識をもつことが、人間として一歩前進する思考であるということを、否定する雰囲気さえ醸成されている。
- (4)カウンターパワーである労組は、時代の先頭を走っている存在ではなく、時代のしんがりにかろうじてついているようなイメージに反転してしまっている。
- (5)労使対等という意識も希薄化し、労働組合の原点である「雇用重視」の防波堤さえも崩れようとしている。
- (6)労働組合役員と職場の組合員との絆が細くなっている。
- (7)見えてくる運動では、労働組合が雇用の安定している労働者や大企業で働く男性正社員の利益のみを代表しているようにも見えるし、労使協調路線のなかにどっぷりと浸かっていて、緊張感が足りないとも感じられる。
- (8)働く国民の利害を代表する組織に名実ともになり、国民が連帯できる組織となるために、労働組合が思い切った変身を遂げる必要がある。

評価委報告は、こうした労働組合（連合）への認識から、(1)労働運動の理念・思想の再構築――①労働の評価を見直し、労働運動の存在理由を再確認する、②弱い立場にあるものが協力、連帯して不条理に立ち向かえる、(2)高い「志」、不公正や不条理なものへの対抗力、そ

れを正すための具体的運動と闘う姿勢、(3)働く者の意識改革―労働者の自立と自律、そして連帯へ、(4)企業別組合主義からの脱却―企業別組合の限界を突破し社会運動としての自立を、かかげる。

彼らの発想の基本は「働く者」、「労働者」との言葉は「労働者の自立と自律、そして連帯へ」に見ることが出来るだけだ。「働く者」とは土地貴族、現代にあつては金利生活者を除くすべての人に該当する。資本家（経営者）として働く者である。まずこんな階級融和の考えから報告は作成される。さらに、「労働組合よりもっとしつかりせよ。労資の緊張感を欠く時、職場の安定帯が崩れる恐れ」との日本経済生産性本部の主張もある。この報告は、この筋からの報告とも読みとれる。

労働組合は必要な存在へ　すさまじい技術革命と生産価格の低下、激しい競争は、突然の市場膨脹にもかかわらず独占企業から安定的な市場支配を奪い取った。大企業といえ安住を許されぬ仁義なき競争社会となった。大企業は独自の福利厚生、世に出ぬ「第二の賃金」で会社社会、企業忠誠心をつくり、社員を「特権的」労働者層とした。

会社に忠誠をつくすかぎり、生活は確保できることが、企業社会の根本だった。しかし、企業は生き延びるため、社員をはじく。はじき方は様々だ。それと同時に、企業忠誠心を軸とした会社社会はくずれ去る。社員に代えて不安定労働者群が「雇用の多様化」として導入される。社員は減り、不安定雇用労働者群はふえる。彼らがふえる度合いに比例して社員の労働条件は下がる。

労働組合はこうしてどうしても必要な存在へとなっていく。

（滝野 忠）

『共産党宣言』のグローバリズム

―現代資本主義の基礎（二）―

グローバリズムの進展は商業資本の世界的展開過程からまず開始された。商業資本の運動は商品を安く買い高く売ることである。市場の拡大は生産力増強を要請した。労働手段が道具から機械にとって代わられたことで、広義の資本主義体制は一変した。道具を使うのは人である。人の生理的能力に限界がある。だが機械は人を使い、機械力に限界はない。機械の発達にともない、生産手段の持ち手であった手工業者は熟練技から解放されると同時に、労働手段からも解放され「自由」となった。労働者階級の誕生である。二重の意味で自由な労働力が形成されたことに一八〇―一九世紀の産業革命の決定的意義がある。

人間の精神的・肉体的に労働するという能力を労働力という商品に転化することで、資本はこれまでの狭い限界から解き放たれ、世界を真にグローバルなものにした。荒々しいムキダシの搾取がこの時代の資本主義の特徴であり、その実態を生なましく描いたのがエンゲルスの資本主義先進国『イギリスにおける労働者階級の状態』である。資本ははてついでに自由主義だ。資本の価値増殖を拒む旧い封建遺制度を粉砕した。資本家階級は貴族階級に闘いを挑み、己が欲する社会に社会を変革した。それが一九世紀における自由主義経済であり、その政治的現れが「安価」な政府論であった。

資本はかつての大帝国、王侯貴族とまったく異なる仕方でもグローバリズムを押し進め、世界を征服した。資本主義という社会体制を旧来の封建的諸体制との違い、そして「働く者」、民族の将来の行方を資本主義生成期に分析したのがマルクスの『共産党宣言』であり、エン

ゲルスの『共産主義の原理』であった。マルクスとエンゲルスは資本主義の「構造」を明らかにしたのである。

『資本論』は資本の生産、流通、総過程から、『共産党宣言』は資本主義的生産関係を歴史的、かつ理論的に解きあかし、資本主義社会の社会主義社会への革命的变化の必然性を明らかにする。『資本論』は難しい。思考力、抽象力、考える能力が要請される。しかし、『共産党宣言』は世界史についての全般的知識、年表があれば十二分に読みこなせる。

現代社会は資本主義社会。新自由主義、グローバリズムについて、保守主義者、「改革」者、「革命」家が好き勝手に語り、分析する。資本の自由主義とグローバリズムについて、その基本性格を分析しているのが『共産党宣言』である。まずグローバリズムについて。

- ①「自分の生産物の販路をつねにますます拡大しようという欲望にかりたてられて、ブルジョア階級は全地球を駆けまわる。どんなところにも、かれらは巢を作り、どんなところをも開拓し、どんなところとも関係を結ばねばならない」(岩波文庫版、四四頁)。
- ②「ブルジョア階級は、世界市場の搾取を通して、あらゆる国々の生産と消費とを世界主義的なものに作りあげた。反動家にとってはなほだおきの毒であるが、かれらは、産業の足もとから、民族的な土台を切りくずしている。遠い昔から民族的な産業は破壊されてしまい、またなおも毎日破壊されている」(同)。
- ③「それ(産業)はもはや国内の原料でなく、もっと遠く離れた地帯から出る原料にも加工する産業であり、そしてまたその産業の製品は、国内自身において消費されるのである。国内の生産物で満足していた昔の欲望の代わりに、あたらしい欲望があらわれる。このあたらしい欲望を満足させるためには、もっとも遠く離れた国や気候の生産物が必要になる。昔は地方的、民族的に自足し、まとまっていたのに対して、それに代わってあらゆる方向との交易、民族相互のあらゆる依存関係があらわれる」(同)。
- ④「物質的生産における同じことが、精神的な生産にも起こる。個々の国々の精神的な生産物は共有財産となる。民族の一面性や偏狭は、ますます不可能となり、多数の民族のおよび地方的文学から、一つの世界文学が形成される」(同)。
- ⑤「ブルジョア階級の商品の安い価格は重砲隊であり、これを打ち出せば万里の長城も破壊され、未開人のどんなに頑固な異国人嫌いも降伏をよぎなくされる。ブルジョア階級は、かれら自身の姿に型どって世界を創造する」(同、四五頁)。

産業資本主義の時代、ブルジョア階級は世界市場を資本主義的方法で包み込んだ。世界の工場としてイギリスが資本主義を主導した。繊維工業から重化学工業への産業構造の変化、巨大な設備投資の必要は信用制度、株式会社制度を急速につくり出し、資本主義は独占資本主義へと転化した。資本の搾取はさらに強まり、資本に抗する労働、政治、社会運動が前進した。それらの運動は資本が勝手気ままにふるまうことに反対し、資本の自由な搾取の手を縛ったのである。決定的な影響を与えたのはロシア革命、民族独立解放闘争、社会主義世界体制の成立であり、世界市場は資本主義が一人で包摂するのではなく、世界市場が資本主義と社会主義の経済体制に分断された。(つづく・伊勢 太郎)

人類救済の有効な哲学とは

— 時代閉塞からの脱出口(二) —

人類の師匠ともいうべき、偉大な先哲たちは、例外なく、人間存在を根源的、普遍的に考察し、そのことで人間および社会・この世の救済を企て、行動し、言葉を残した。

その行動の仕方は、宗教活動であったり、革命運動であった。言葉の残し方は、ロゴス(哲

学や広義の学問理論)であったり、パトス(芸術、文学など)であった。そのロゴスとしての救済思想ないし救済工学の、よく知られた例としては、次のものがある(安藤昌益やカール・マルクス)。

まず、自然世(分かち合う、平等な、自然と共生していた無階級社会・原始共同社会)が何千年、何万年もつづいていた。日本列島でいうなら縄文時代がそれに当たる。ところが、次には法世(支配・被支配のある階級社会)に移行していった。列島でいうなら、弥生時代から今日に至るまでの二千年余。なぜそのようなように移行していったのかについては、いろいろな理由や原因があるようだ。

例えば、稲作などの農業を発見・発明することで生産力が発達し、財力の偏たりが生じ、そこから武力、権力も生じ、ますます偏たりがひらいて、やがて階級化する。そのことで、所有欲、蓄財欲、支配欲などの欲望が触発されてくる。資本制近代に至っては、その欲望は「貨幣、剰余価値、搾取、収奪、国家など」と不可分のものとなる。それに伴って、この階級差別社会を正当化するイデオロギー群も量産されてくる。「たかが選手に過ぎないッ」(ナベツネ氏)のように、人間はそもそも平等じゃないのだというイデオロギーが、ありとあらゆるところで垂れ流される。労働現場、学校、行政、国会、マスコミ、司法などだ。学問とか歴史認識とか宗教の多くも、この垂れ流しの走狗になっている。

それゆえに、この自然世↓法世を、より高次の自然世に創築していかねばならぬ。さもないと、弱者大衆(被支配階級)の不幸や辛さはいつまでも払拭されない。

この、より高次の自然世の創築は、大衆の自覚、学習による共同・団結の意志によってなされなければならないが、その自覚や意志を妨げる企みは支配階級によって断になされているので、困難なことではあるが、いざれ生産力や知識の普及で「必然的に」なされなければならない。云々。まさに救済思想の面目躍如である。これが昌益やマルクスのきわめて巨視的な考察であるが、単に思弁的にユートピア(どこにも実際には存在しない絵空事)を語ったのではなく、二人の当時の現実の凝視→アクチュアリティ、課題解決と結びつけて、ロゴス化されたのであった。

安藤昌益の凄いとところは、当時(江戸中期)としては権威があったが、今から見れば反人間的な、ガラクタ理論(朱子学、陰陽道、道教、氣、ブトレマイオス天動説、それに仏教など)をきちんと学び、反面教師的に換骨奪胎して、自然世↓法世↓自然世の革命思想を、マルクスよりも百年も早く独創したことであった(ガラクタ理論を全面否定していった)。

東京新聞の文化欄は面白くするためになる記事が時々載っているが、十月二十六日付(〇四年)には、哲学者の梅原猛氏が「人類の哲学」というべきものを十年前に思いついた。西田幾太郎のように西欧と東洋を結びつけた(統合した)哲学を紡ぎ出したい。今までは自信がなかったがイチローに刺激を受け、日本人なら可能ではないか」と書いていた。

私はこのとき昌益のことが頭をよぎった。梅原氏には、この昌益をも包摂したような、人類救済の実効的なロゴスを期待したいものである。(つづく・六津 五郎)

◇ 編集 部 だ よ り ◇

国鉄分民問題は、分民から二〇年の〇七年に向け、さまざま動きを見せる。(1)「完全民営化」の枠組みづくり、(2)本州3社(東海の株)上場、(3)3島・貨物の「合理化」推進と黒字化、(4)JR内労働戦線再編、(5)NTT株放出、(6)郵政「分割・民営化」の実施。この動きの中に一〇四七人問題があります。事態は容易じゃない。鉄建公団裁判についても同じ。当面の問題と同時に、これからの問題も！

消えゆくドル

—この世界で最も重要な基軸通貨はいつまでその地位をたもてるか？—

ドルは誰もが考えるように、支配的な国際通貨であり続けてきた。しかし、その巨大な役割を担い続けることはもはやできない。もしアメリカが今のように消費し、借り入れ続けるなら、ドルはいつかはその国際金融における強力な地位を失うであろう。そしてこれにより、国際準備通貨と印刷できるという特権を失うことになる。

この現在、危機に立たされている特権こそ、アメリカが他国よりはるかに良い条件で安価に借り入れ、そのために稼ぐよりはるかに費消することを可能にしているものなのである。受け取ってもらえるだろうと思つて小切手を切つても、現金化できないという想像してみよう。事態はここまできているのである。もし今アメリカが享受しているような力をもつていたなら、これになんとしてみしがみつこうとするだろう。だが、アメリカは無頓着である。後悔することにならう。

無視することによるコスト

ドルに昔日の面影はない。過去三年間に対ユーロでは三五%安くなり、対円では二四%下落した。が、最近の下落は立ちの悪い無気力感の完全な兆候といえる。すなわち、国際金融システムは恐ろしく緊張しているのである。アメリカは、ごく控えめに言つても、世界の主要な基軸通貨の番人としてはふさわしくない習慣を持つている。野放図な政府の借り入れ、無茶苦茶な消費、そしてアメリカ以外の国ではときに破綻に陥れられてきた巨額の経常赤字。これがアメリカドルの下落を不可避にし、そればかりか巨額の債務を抱えるアメリカ大陸諸国の先頭へと立たせようとしているのである。政策責任者たちはドル安について語っているようだが、それは危険なゲームである。下落することが確実な通貨を誰が買おうというのか？

混乱した国際金融システムの第二の様相は、アメリカの安易な政策が国境を超えるにつれ、巨額の貨幣圧力となつていることである。以前のどの時期よりも、国際流動性の総額はますます膨れ上がつている。アジア諸国に顕著なように、ドルに自国通貨を固定している新興国は、アメリカ連邦準備制度理事会の超金融緩和政策を増幅することを余儀なくされている。自国の通貨価値を低く抑えるために中央銀行がドルを買うとき、彼らは地域通貨の増刷に迫られるのである。今のところ、この国際流動性の噴出 (out) はインフレをもたらしはしていない。そのかわりに、全世界の諸高級品や不動産所有に流れ込んでおり、一連の資産バブルを膨れ上がらせているのである。

アメリカの経常収支赤字は世界の注目の的である。OECDの直近の経済予測では、交換レートが変わらないと仮定して、赤字は二〇〇六年には八二五〇億ドルに至る (アメリカの国内総生産にGDPの六・四%)。楽観主義者は、アメリカの流動資産 (注2) は高いリターンを保証し、リスクを回避してくれるので、外国人は赤字を埋める融資をし続けていくと主張している。しかし、実際は民間投資部門ではすでにドル資産から逃避する動きが始まっている。最近ではアメリカへの投資の見返りは、ヨーロッパや日本へのそれより低くなつている。そして世界でドルに次ぐ力をもっている二つの通貨に対して、この三

○年間、減価し続けている通貨を「安泰」ということができるだろうか？

自由市場においては、アジア諸国の中央銀行による強力な支援を欠いては、ドルはより一層弱体化してしまふだろう。しかし、その支援にも自ずから限度があり、ドルは今も更に下落していくように見える。その経済的打撃はいかばかりであろうか？ ドルは本当に基軸通貨の地位を失ってしまうのだろうか？

これまでドルが下落した時期は、世界経済にとつては不幸な期間であった。一九七〇年代初頭に弱体化したドルがもたらしたブレトン・ウッズ体制（注3）の崩壊は、すべての国々を傷つけ、うなぎ上りのインフレと不況をもたらした。一九八〇年代後半、下落するドルはアメリカ経済そのものにはあまり悪影響を与えなかったが、日本の金融当局に利率引き下げを強いることにより、日本におけるバブルの膨張の大きな要因となった。

今回については、だれもが、誰彼をさして批判の指を立てようとする悪しき兆候がある。アメリカ自身はその対外債務の原因をヨーロッパと日本の緩慢な成長ぶりに帰したり、中国が人民元の交換レートを不当に低く固定していることの責任にしている。ユーロの急速な高騰に驚いたヨーロッパは、アメリカの公的借入れの高さと家計の低い貯蓄率が本當の犯人だと語っている。

どちらの主張にも言い分はある。中国と他のアジア諸国は、ユーロにかかる重圧を緩和するためにも、通貨価値を引き上げるべきだろう。また、アジアがこの事態の一部の原因をアメリカの消費者のおおしやぎにあるとして非難するのも正しい。すなわち、アジア諸国の中央銀行によるアメリカ国債の大量購入が、その減価を防ぎ、アメリカの家計の巨額のローン組み立てや現金支払いを奨励する形になっているのである。そして、ヨーロッパは弱いドルがもしアメリカの赤字を縮減させ未来のリスクを減じるとするならば、不承不承ながらもよいこととしてこれを受け入れる必要がある。同時に、ヨーロッパもまた正しい。アメリカの赤字の大半の原因は国内要因に起因しているからである。アメリカは財政赤字を圧縮する必要がある。この問題はあれかこれかではない。危機回避のためには、弱いドルと高いアメリカの貯蓄率が共に求められているのである。

単純だが苛烈

アメリカの多くの政策立案者たちは、彼らの抱えるすべての問題をいくらかでも解決していくためには全面的に下落していくドルに頼っていくのがよいかに語っている。おそらく、そのように事態は進んでいくだろう。が、そのような一方的な弥縫策（びほうさく）では、彼らが想像するよりはるかに重大な打撃をこうむることになる。アメリカの抱える難題は、外国人投資家が喜んでドルの流動資産に融資するように経常収支赤字を削減させるばかりでなく、現在の外国人債権者たちに十一兆ドルにもほる巨額のドル資産（注4）を手放さないように説得するというにもあるのである。経常収支赤字を解消するに充分なドル安の進行は、ドルの避難所（safe-haven）としての地位を奪い取ることになる。ドルがさらに三〇%下がると予測する者もいるが、これは前代未聞の債務不履行につながっていくだろう。債務元利不払いという通常の債務不履行ではなく、ステルス（注5）による外国人保有のドル資産価値の数兆ドルにのぼる一掃となるのである。

ドルが基軸通貨の地位を失うことは、アメリカの債権者たちが債権を現金化し始めるこ

とつながり、膨大な債権が現金化されるのである。このプロセスがベースをつかむと、ドル価値は暴落に次ぐ暴落ということになる。アメリカ国債の利率(長期利率)は急上昇し、深刻な不況が訪れることは間違いない。弱いドルを志向するアメリカ人は、彼らが望んでいることを注意深く再考すべきである。財政赤字を削減することの方が、安くつくのである。(ザ・エコノミスト、〇四年十二月四〜十日号、訳と注 神戸 育郎)

注1、The Economist 『エコノミスト』英国の週刊経済誌。一八四三年創刊(『ランダムハウス』による)。エコノミストは二〇〇四年二月一〜一七日号で「薄っぺらな資産」(Flimsy Foundations)というタイトルの記事の中で各国の不動産価格の指標を掲載しているが(63頁)、大変興味深い。

この記事ではまず過去三年間の先進国における住宅総資産価値が、二〇兆ドルから六〇兆ドル以上に増大したことに触れられている。また、日本のバブル崩壊のおぞましい例を引き、一九八四年から一九九二年までの七年間に日本では三六%の住宅資産価値の高騰があり、その後三五%下落したことをあげている。一九九七年から二〇〇四年の七年間に日本のバブル期を上回る資産価値急騰が進んでいる国は一四カ国ある。IMFは警鐘をならしているという。途上国も含めると途方もないバブルが形成されていると容易に想像がつく。

注2、流動資産(assets) 短期間(通常一年以内)に資金として回収される資産。現金・預金・売掛金・受取手形・商品・半製品・原材料の類。↓固定資産(『広辞苑』による)

注3、ブレトン・ウッズ協定 一九四四年アメリカのブレトン・ウッズで開かれた連合国通貨金融会議において調印された国際通貨基金(IMF)協定、国際復興開発銀行協定の総称。四五カ国が参加し、アメリカ主導のもと自由主義に基づく国際経済協力をめざした(『角川世界史辞典』より)

注4、前号でも紹介したように、その三八・八%を日本がもち、次いで中国(九・四%)、イギリス(七・三%)、カリブ海諸国(五・四%)、韓国(三・六%)、台湾(三・一%)、ドイツ(二・七%)、香港(二・七%)、スイス(二・六%)、OPEC諸国(二・三%)、メキシコ(一・八%)、カナダ(一・八%)と続く。日本はアメリカの金城湯池であり、これが離反すると、もはやアメリカ合衆国体制は崩壊せざるをえないのである。また、中国と香港、台湾を合わせると一五・二%となり二〇兆ドルを超える。これが台湾海峡をアメリカがどうしても軍事的に重視せざるをえない大きな要素であることは間違いない。

注5、Stealth ①内密の「ひそかな、人目を忍んだ」やり方、忍び、隠密、②こっそり立ち去る「入り込む」こと、③《廃》(1)盗み、(2)盗品 ぶんどり品、④《時にSー》《話》【軍事】ステルス、秘匿性

◇ 読者からのおたより ◇

来年も遅くなってスママセン、来年も頑張りましょう。

(埼玉・S)

編集部より 誌代ありがとう。情勢に変化がみられます。来年こそは反撃への一歩をつくろうよ。

十・二一反戦デモ 十月二十一日(木) 県庁議会棟下広場で、宇都宮地区労主催による国際反戦デー地区集会とデモを開催した。小泉内閣は、米英の大義なきイラク戦争にも追従し、自衛隊をイラク「サマワ」に派兵したばかりでなく「多国籍軍下」にもおいた。さらには「戦争のできる」国づくりをするため憲法改正を日程にのぼらせている中、地区労の仲間三百名が反戦・平和の声を高らかに訴えた集会でした。(宇都宮地区労)

編集部より この日、私めも十・二一集会で地方におりました。

残りにはカンパ、カンパイして！ 半期分です。一年間ありがとう。二〇〇五年度も頑張りましょう。残金はカンパです。皆様でカンパイして。(千葉・A)

編集部より こんなにカンパイいただいて、いいのでしょうか。国労の仲間とカンパイできるように使わせていただきます。感謝。

〇四賃金闘争 都労連(六単組・十万人)と特区連(二三区・七万人弱)と東京清掃労組の〇四年賃金闘争は、都労連の苦渋の妥協と、二三区+清掃労組の闘争継続となった(十一月一六日現在)妥結の中味の最大の問題点は「普通昇給停止年齢引き下げに伴う経過措置」を、既に妥結して確定していた内容を、今年途中から改悪を迫られ、呑まされたことである。つまり労使合意が破られたのである。都当局の強権によって。残念である。(東京・T)

各地で続く「高裁勝利！」の共有 一〇・一七茨城ユニオン大会に約三〇人が参集、「四・二八高裁勝利、講演会」が開かれて名古屋免職者が二五年間の闘いを語った。始めての出会いであったにもかかわらず、和気あいあいと二次会まで大変な歓迎を受けた。(四・二八から)

編集部より 連日、全国を行脚されているようす、ご健康にご留意を!

平和憲法守ろう! 参議院選挙後の国会は国民投票案・各党の改憲案の作成公表など一気に改憲ムードに包まれています。自衛隊のイラク派兵、国民保護法等有事体系の完成。「日の丸・君が代」処分など平和・民主主義・人権の「内堀・外堀」が共に埋められ、憲法の明文改悪もスケジュールにのぼっています。こんな中で、私たちの気持ちに届かないイライラや無気力感におおわれているみなさん。こんな気持ちの人はたくさんいます。あきらめたらおしまいです。まず集まって話し合ってみよう。

(山形・M)

編集部より 先日はお世話になりました。Mさんが報告された内容、現地でもお願いしましたが、原稿にして下されば嬉しい。

若者ともっと本音で 忙しい生活の中で、普段忘れがちな様々な社会問題を思い起こす、よい機会になったと思います。主催者の方々に一つ申し上げたいのは、「もっと一般の若者と本音で話し合う機会を設けた方がよいのでは」ということです。例えば私は、講演された方が感じているであろう危機感をあまり持ちえなかつたし、共感も少なかつた。本音の議論から、活発な運動が生まれる可能性があるのでないかと思いました。

(山梨・X)

編集部より 過日私が出席し、お話ししたことへの若者からの感想です。数十人の方の「通信簿」の一つです。

明るく元気に どっちを見ても、不条理のまかり通る世の中。そこに立ちほだかり、待ったをかける私たち。今年も明るく元氣、といきましょうや。(島根・I)

編集部より 「群れて流れる」のが日本人の性格のようです。そしてまた第二次世界大戦前の時代風潮。「待った」かけるためがんばりましょうよ。

いよいよ山場 鉄建公団訴訟もいよいよ山場! ○五年こそ皆が納得する解決の年に! J R本隊から、多くの国労組合員と共に奮闘する決意です。(さいたま・M)

編集部より 前号にのつけた木山さんの大論文、ごらいただけましたか。必要なのはこの気迫。J R本隊国労組合員一人ひとりが己の構想もつ時です。

エリートと「愛国人間」育成 品川区では文部科学省の実験地区としての「教育改革」が五年前から進められています。新自由主義と国家主義にもとづく一部のエリートと大勢の実直な人間、国を愛する人間づくります。学校選択制を手段として競争をとおし、結局は全小中学校に中小一貫カリキュラムを押しつけてきました。「能力主義」によるエリート育成と「市民科」による「愛国人間」育成が明らかになってきました。教育基本法の改悪阻止と繋げて反撃することが必要。(東京・I)

編集部より 進行中の「教育改革」なるものは「選択の自由」(フリードマン)、アメリカの経済学者。反革命後のチリで反革命の一環として国営企業民営化、規制改革を実験)の受け売りです。一読されることおすすめします。

安心安全な社会めざす 支払いが遅れてすみません。正義が通らない世の中になりつつありますが、安心安全な社会、暮らしやすい社会をめざして地域からがんばります。(新潟・S)

編集部より 効率主義、軍備増強こそ安心、安全の社会への敵対者です。**学校に競争原理** 学校現場も学力不足:とかで子どもたちもたいへんです。教育労働者の方も指導力不足:からS・A・B・C・Dとかランク付けが全国で始まっているようです。神戸ではアクティブプランと称して学校内学校間の競争が教育委員会から即PTAや市民に出されていくという形で、現場で働く者は追い立てられているようです。労働者の意識や組合がどう歯止めをかけて異議申し立てをするのか、やっぱり声を上げていくしかないと思う毎日です。(神戸・K)

編集部より こんなにくるくる政府の方針が変えられたのでは教育現場はむろん親や子どももたいへん。社会への不信はそこから拡大しますよね。

第二次陣拡大、闘争費 国鉄闘争、とくに採用差別問題も○五年が山場になると思います。私もこの闘いを自分自身の問題として頑張ってきました。鉄建公団訴訟の第二陣拡大と闘争費の集約に向け努力中とのこと。多くの仲間の理解と協力が必要です。私も自分のことと受け止め共にがんばります。下記に住所変わりました。遊びにきて下さい!

(神奈川・A)

編集部より 遊びにうかがいます。茅ヶ崎ですか。藤沢で私のいとこの子息がフランス料理のシェフをやっているようです。そこで会食といきますか。ご活躍祈ります。